

「ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 (坂口綺那)

ハノイで2週間過ごして思ったのは、とても賑やかであることだ。とにかくバイクが多い。一度外に出れば、クラクションの音を聞かないことはないし、横断歩道を渡るのも一苦勞。日本ほど公共交通機関が発達していないベトナムでは、バイクが主要な移動手段なのだ。また予想以上に高層マンションが多く、工事現場も見かけ、急速に開発が進んでいるのを肌で感じた。

街の様子に違わず、人々も明るく元気だ。道端では行商人や若者たちの交わす元気な声が聞こえる。最初はベトナム語が全く分からず、早口でまくし立てる彼らの様子に多少の恐怖心さえ抱いていた。しかし数字など少し聞き取れるようになると何となく会話の内容が想像できるようになって、安心感と嬉しさが生まれた。

また本プログラムにおいて、人文社会大学と外国語大学で現地学生の日本語授業に参加させていただいた。主に2年生の授業であった。みんな明るく、積極的に私たち日本人に話しかけてくれた。たどたどしいながらも、どこから来たの?という質問や何を学んでいるの?という質問を投げかけてくれて嬉しかった。

そして学生サポーターの方々は明るく親切で本当によくしてもらった。現地で特に不自由なく生活できたのは彼女らのおかげである。忙しい中、放課後や休日に観光地を案内してくれたり、時には自分のクラブ活動に誘ってくれたりした。私たちの移動手段であったタクシーの手配や、買い物や食事の時に通訳の役割をしてくれた。彼女らは日本語が本当に堪能で、ベトナム人と会話しているということのを忘れるくらいであった。例えば博物館に連れて行ってもらったときには、すべて日本語で丁寧に解説してくれた。英語もままならない私にとって、彼らの語学力には本当に舌を巻く思いだった。彼女らと交流し、ベトナムの交通事情や文化、学生生活や進路など、ただ観光するだけでは知ることはなかったであろうことを学ぶことができてよかった。さらに母語以外の言語を身につけることで、外国の方々との交流が円滑かつ豊かになる可能性について身をもって体験できたのはよい刺激となった。今後、英語や他の言語を学ぶモチベーションにつながったと思う。

そもそもこのベトナム研修に私が参加したのは、ベトナムの文化、特に食に興味があったからだ。それで個人的には「ベトナムの食」というテーマを掲げていた。2週間の滞在でいろいろなベトナム料理を口にしたが、印象に残ったのは米麺の存在だ。一口に米麺と言ってもその形状から、フォー、ビーフン、ブン、フーティウなど様々な種類がある。屋台のメニューには大概フォーがあり、ホテルや大学周辺でもフォーやブンのお店がある。また、ホテルの朝食にもフォーが出てきたことから、ベトナム人にとって米麺は欠かせない食なのだと感じた。さらに、大皿に盛られた料理をみんなでシェアするのがベトナムスタイルの食事だと学び、中国風文化が根底にあるのだと感じた。たしかに訪れた寺院はどれも中国風建築であったし、街の中にも中国風の廟を見かけた。このように本場の味を楽しみ、総合的に文化を体感できたのは、実際に2週間も滞在できたからだと思う。ただ、今回の渡航を通してだけではまだまだベトナムの文化についての一端しか知ることができなかったもので、今後とも学んでいきたいと思う。

最後に本プログラムでは家族や先生、学生など本当に多くの方々にお世話になり、貴重な体験をさせていただいた。今渡航を通して、つくづく自分は幸せ者だと思わされた。本当にありがとうございました。そして、この充実した2週間の経験を今後ぜひ活かせるよう努めていきたい。